

2022年度 八戸学院大学

地域経営学科・人間健康学科・看護学科

一般選抜（Ⅱ期）

国 語

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないこと。
2. 筆記用具は黒色の鉛筆またはシャープペンシルを使用すること。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁に気付いたときは、手を挙げて監督者に知らせること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよい。
5. 問題冊子は持ち帰ってよい。

【I】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、一部表記を改めている所がある。

それから幾分か過ぎた後であった。ふと何かに脅かされたような心もちがして、Aあたりを見まわすと、いつの間にか例の小娘が、向う側から席を私の隣へ移して、しきりに窓を開けようとしている。が、重い硝子戸はなかなか思うようにあがらないらしい。あの軋だらけの頬はいよいよ赤くなって、時々鼻涙をすすりこむ音が、小さな息の切れる声といっしょに、せわしく耳へはいつてくる。これはもちろん私にも、いくぶんながら同情をひくに足るものには相違なかった。しかし汽車が今まさにトンネルの口へさしかかろうとしている事は、暮色の中に枯草ばかり明るい両側の山腹が、間近く窓側に迫って来たのでも、すぐに合点の行く事であった。Bこの小娘は、わざわざしめてある窓の戸を

下そうとする、—その理由が私には呑みこめなかった。いや、それが私には、単にこの小娘の気まぐれだとか考えられなかった。だから私は腹の底に①イゼンとして険しい感情を蓄えながら、あの霜焼けの手が硝子戸をもたげようとして悪戦②クトウするようすを、Cそれが永久に成功しない事でも祈るような③レイコクな眼で眺めていた。D間もなく凄じい音をはためかせて、汽車がトンネルへなだれこむと同時に、小娘の開けようとした硝子戸は、とうとうぱたりと下へ落ちた。そうしてその四角な穴の中から、煤を溶かしたようなどす黒い空気が、に

わかには息苦しい煙になって、もうもうと車内へみなぎり出した。④ガンライ咽喉を害していた私は、ハンケチを顔に当てる暇さえなく、この煙を満面に浴びせられたおかげで、ほとんど息もつけないほど咳きこまなければならなかった。が、小娘は私に頓着する気色も見えず、窓から外へ首をのびして、闇を吹く風に銀杏返しいちょう返しの鬢びんの毛を戦そよがせながら、じっと汽車の進む方向を見やっている。その姿を煤煙と電燈の光の中に眺めた時、もう窓の外が見る明るくなって、そこから土の匂いや枯草の匂いや水の匂いが冷ややかに流れこんでこなかったなら、ようやく咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、また元のとおり窓の戸をしめさせたのに相違なかったのである。

しかし汽車はその時分には、もうやすやすとトンネルをすべりぬけて、枯れ草の山と山との間に挟まれた、ある貧しい町はずれの踏切に通りかかっていた。踏切の近くには、いずれも見すばらしい藁屋根や瓦屋根がごみごみと狭苦しく建てこんで、踏切番が振るのであろう、—疏のうす白い旗がものうげに暮色を揺すっていた。やつとトンネルを出たと思う—その時その蕭索しょうさくとした踏切の柵の向うに、私は頬の赤い三人の

男の子が、目白押しめじろおに並んで立っているのを見た。彼らは皆、この曇天に押しすくめられたかと思うほど、揃そろって背が低かった。そうしてまたこの町はずれの陰惨たる風物と同じような色の着物を着ていた。それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一斉に手を挙げるが早いか、いたいけな喉を高く反らせて、何とも意味のわからない1喊声かんせいを一生懸命にほとばしらせた。するとその瞬間である。窓から半身を乗り出していた例の娘が、あの霜焼けの手をつとのばして、勢いよく左右に振ったと思うと、たちまち心を躍らすばかり暖かな日の色に染まっている蜜柑みかんがおよそ五つ六つ、汽車を見送った子供たちの上へばらばらと空から降って来た。私は思わず息を呑んだ。そうして2刹那せつなに一切を了解した。小娘は、おそらくはこれから奉公先へ⑤オモムオモムこうとしている小娘は、その懐かくに蔵かくしていた幾果いくかの蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切まで見送りに来た弟たちの労に報いたのである。

暮色を帯びた町はずれの踏切と、小鳥のように声を挙げた三人の子供たちと、そうしてその上に乱落する鮮やかな蜜柑の色と―すべては汽車の窓の外に、瞬く暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には、切ないほどはつきりと、この光景が焼きつけられた。そうしてそこから、3ある得体の知れない朗らかな心もちが湧わき上がってくるのを意識した。4私は昂然こうぜんと頭を挙げて、まるで別人を見るようにあの小娘を注視した。小娘はいつかもう私の前の席に返って、相変わらず鞆たるだらけの頬を萌黄色もえぎいろの毛糸の襟巻えりまきに埋うずめながら、大きな風呂敷包みをかかえた手に、しつかりと三等切符を握っている。：

私はこの時始めて、言いようのない疲労と倦怠けんたいとを、そうして又不可解な、下等な、退屈な人生をわずかに忘れることができたのである。

芥川龍之介『蜜柑みかん』

(注1) 一旒：旗の数え方。

(注2) 簫索とした：ものさびしい様子。

問一 傍線①～⑤のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 空欄A～Dにあてはまる語を次からそれぞれ選び記号で書きなさい。

ア 思わず イ すると ウ にもかかわらず エ まるで オ ただし

問三 傍線1は弟たちのどのような気持ちからか。二十字以内で書きなさい。

問四 傍線2とあるが、何を了解したのか。五十字以内で説明しなさい。

問五 傍線3とあるが、「私」がこのような心もちになった理由を二十五字以内で説明しなさい。

問六 傍線4はどのような気持ちによるものか。次から一つ選び記号で書きなさい。

- ア 小娘の行動の意味がわかった安堵感。
- イ とんでもない行動をする小娘に対する興味や好奇心。
- ウ 小娘たちの境遇への同情。
- エ 他人事とは思えない小娘たちへの親近感。
- オ 小娘たちが見せた思いやりと真心への感動。

問七 芥川龍之介の作品を次から二つ選び記号で書きなさい。

- ア 斜陽
- イ 金閣寺
- ウ 河童
- エ 蜘蛛の糸
- オ 人間失格
- カ 草枕
- キ 舞姫

【Ⅱ】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、一部表記を改めている所がある。

「非常時」というなんとなく不気味なしかしはつきりした意味のわかりにくい言葉がはやりだしたのはいつごろからであったか思い出せないが、ただ近来何かしら日本全国土の安寧を脅かす黒雲のようなものが遠い水平線の向こう側からこっそりのぞいているらしいという、言わば取り止めのない悪夢のような不安の陰影が国民全体の意識の底層に揺曳していることは事実である。そうして、その不安の渦巻の回転する中心点とは言えばやはり近き将来に期待される国際的折衝の難関であることはもちろんである。

そういう不安をさらにあおり立てでもするように、今年になってからいろいろの天変地異がわが国土を襲い、そうしておびただしい人命と財産を奪ったように見える。あの恐ろしい函館の大火や近くは北陸地方の水害の記憶がまだなまなましいうちに、さらに九月二十一日の近畿地方台風水害が突発して、その損害は容易に評価のできないほど甚大なものであるように見える。国際的のいわゆる「非常時」は、少なくとも現在においては、無形な実証のないものであるが、これらの1天変地異の「非常時」は最も具象的な眼前の事実としてその惨状を暴露しているのである。

一家のうちでも、どうかすると、直接の因果関係の考えられないようないろいろな不幸が頻発することがある。すると人はきつと何かしら神秘的な因果応報の作用を想像して祈禱や厄払いの他力にすがろうとする。国土に災禍が続けて起こる場合にも同様である。しかし統計に関する数理から考えてみると、一家なり一國なりにある年は災禍が重畳(注4)した他の年には全く無事なまわり合わせが来るということは、純粋な偶然の結果としても当然期待されうる「自然変異」の現象であって、別に必ずしも怪力乱神を語るには当たらないであろうと思われる。悪い年回りはむしろいつかは回って来るのが自然の鉄則であると覚悟を定めて、良い年回りの間に充分の用意をしておかなければならないということは、実に明白すぎるほど明白なことであるが、またこれほど万人がきれいに忘れがちなこともまれである。もつとも2これを忘れているおかげで今日を楽しむことができるのだという人があるかもしれないのであるが、それは個人めいめいの①テツガクに任せるとして、少なくとも一國の為政の枢機に参与する人々だけは、この健忘症に対する診療を常々怠らないようにしてもらいたいと思う次第である。

日本はその地理的の位置がきわめて特殊であるために国際的にも特殊な関係が生じいろいろな仮想敵国に対する特殊な②ボウビの必要を生

じると同様に、気象学的地球物理学的にもまたきわめて特殊な環境の支配を受けているために、その結果として特殊な天変地異に絶えず脅かされなければならない運命のもとに置かれていることを一日も忘れてはならないはずである。

地震津波台風のごとき西欧文明諸国の多くの国々にも全然無いは言われないうことも、頻繁にわが国のように劇甚な災禍を及ぼすことははなはだまれであると言つてもよい。3わが国のようにこういう災禍の頻繁であるということは一面から見ればわが国の国民性の上に良い影響を及ぼしていることも否定し難いことであつて、数千年来の災禍の試練によつて日本国民特有のいろいろな国民性のすぐれた諸相が作り上げられたことも事実である。

しかしここで一つ考えなければならぬことで、しかもいつも忘れられがちな重大な要項がある。それは、文明が進めば進むほど天然の暴威による災害がその劇烈の度を増すという事実である。

人類がまだ草昧(註5)の時代を脱しなかつたころ、頑丈な岩山の洞窟の中に住まっていたとすれば、たいていの地震や暴風でも平気であつたらうし、これらの天変によつて破壊さるべきなんらの造営物をも持ち合わせなかつたのである。もう少し文化が進んで小屋を作るようになって、テントか掘つ立て小屋のようなものであつてみれば、地震にはかえつて絶対安全であり、またたとえ風に飛ばされてしまつても③フツキユウははなはだ容易である。とにかくこういう時代には、Aは極端にBに従順であつて、Cに逆らうような大それた企ては何もしなかつたからよかつたのである。

文明が進むに従つてDは次第にEを征服しようとする野心を生じた。そうして、重力に逆らい、風圧水力に抗するようないろいろの造営物を作つた。そうしてあつぱれ自然の暴威を封じ込めたつもりになつていると、どうかした拍子に檻おびを破つた猛獣の大群のように、自然があばれ出して高樓を倒壊せしめ④テイポウを崩壊させて人命を危うくし財産を滅ぼす。その災禍を起こさせたもの起こりは4天然に反抗する人間の細工であると言つても不当ではないはずである、災害の運動エネルギーとなるべき位置エネルギーを蓄積させ、いやが上にも災害を大きくするように努力しているものはたれあろう文明人そのものなのである。

もう一つ文明の進歩のために生じた対自然関係の著しい変化がある。それは人間の団体、なにかんぞくいゆる国家あるいは国民と称するものの有機的結合が進化し、その内部機構の分化が著しく進展して来たために、その有機系のある一部の損害が系全体に対してはなはだしく有害な

影響を及ぼす可能性が多くなり、時には一小部分の傷害が全系統に致命的となりうる恐れがあるようになったということである。

単細胞動物のようなものでは個体を⑤セツダン^(注6)しても、各片が平気で生命を持続することができるし、もう少し高等なものでも、^(注6)肢節をセツダンすれば、その痕跡から代わりが芽を吹くという事もある。しかし高等動物になると、そういう融通がきかなくなつて、針一本でも打ち所次第では生命を失うようになる。

寺田寅彦『天災と国防』

(注1) 揺曳^{ようえい}している：雰囲気や感情などがあとまで長く残ること。(注2) 函館の大火：一九三四年(昭和九年)三月二日に北海道函館市で発生した火災。死者二二六名、焼損棟数一万一千棟の大惨事となった。(注3) 近畿地方台風水害：室戸台風(むろとたいふう)による災害。一九三四年(昭和九年)九月二一日に高知県室戸岬付近に上陸、京阪神地方を中心として甚大な被害をもたらした。高潮被害や強風による建物の倒壊被害によって約三千人の死者・行方不明者を出した。(注4) 重疊^{ちようじやう}し：続けて起こること。(注5) 草昧^{そうまい}：世の中が未開で、人知もまだ発達していないこと。(注6) 肢節：両手両足とその関節。

問一 傍線①く⑤のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 傍線1について、「最も具象的な眼前の事実」とは具体的にどのようなことか。二十字以内で書きなさい。

問三 傍線2の指す内容を文章中から七十字以内で抜き出し、その最初と最後の五字を書きなさい。

問四 傍線3とあるが、その理由を文章中から三十五字以内で抜き出さない。

問五 A、B、C、D、E には「人間」、「自然」のいずれかが入る。それぞれ当てはまるほうを書きなさい。

問六 傍線4と同じ内容を表している部分を文章中から二十五字前後で抜き出さない。

問七 「災害」についてあなたの考えを百字以内で書きなさい。